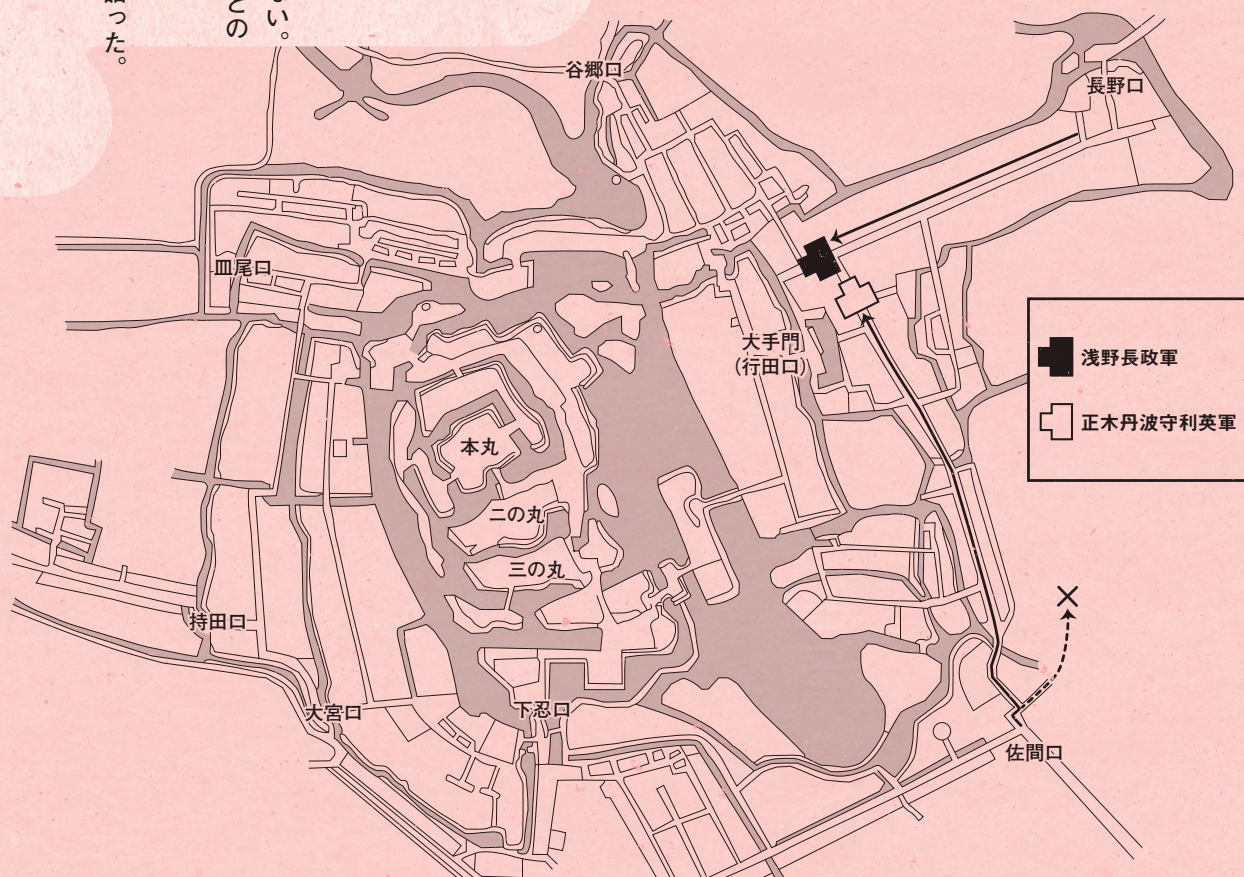


和田 竜

(小説家)

「史料を辿る旅」案内

歴史書の楽しみ方はただ読むことだけではない。
『のぼうの城』『忍びの国』『村上海賊の娘』などの
ヒット作を生み出してきた歴史小説家が、
歴史書に書かれた史実について、
実際に足を使って確かめることの醍醐味を語った。



忍城地図。長野口が破られたと聞いた正木丹波守利英が佐間口からのルートで救援に駆けつけたか。敵だらけの外は通らず、中を通ったはずだと筆者は推測した。

もともと映画の脚本家を目指していた僕は、
戦国時代を舞台にした歴史ストーリーで勝負し
ようと決めてから、主人公に関連する史料を
片っ端から読んでいました。史料に目を通すこ
とは、物語のリアリティを引き立たせるために
欠かせない作業。しかし史料からは出来事の概
要は分かるものの、どんなふう活躍したのか
といった具体的なことが分かる場合は少ない。
しかし現場を見ると、「この狭い領域に三万人
もの兵が押し寄せたのなら、もみくちゃになっ
て死んだんだろうな」などとイメージが膨らみ、
具体的な合戦描写がしやすいのです。

今回は、僕が読んだ史料と、それをもとに足
を運んだ史跡の一部へ、ご案内しましょう。

歩いて分かった奇襲戦のリアリティ

デビュー作で映画化された『のぼうの城』は、
天下統一を目前にした豊臣秀吉が、最後の敵で
ある小田原の北条氏の支城を攻め潰していった
史実を題材にしています。この時、石田三成率
いる二万三〇〇〇の軍勢が攻め寄せ、水攻めま
でも敢行しますが、わずか三〇〇〇の兵で、落
城せずに持ちこたえたのが北条家の支配下に
あった忍城(埼玉県行田市)で、その城主が成

田長親ながちかでした。彼を主人公にした映画の脚本執
筆にあたり読んだのが、『忍城戦記』や『成田記』
です。『忍城戦記』は執筆された年代や著者は不
詳ですが、天正一八(一五九〇)年春に始まっ
た忍城の合戦の詳細が綴られています。それを
参考に忍城攻めについて記述されたのが、成田
氏について記録・編纂された古文書『成田記』
です。「宝暦の火災で旧記が焼失し、事実不明
点が多いので考訂して記録を世に伝える」とい
う史実をもとに、僕はレンタル自転車のかごに
地図やノートが入ったリュックを入れて、JR
行田駅から忍城の本丸地点に移動し、城の形状
や周辺の地理を確認するために歩きました。

確認したかったのは、成田家の家臣・正木丹
波守利英りえが味方を救援した経路。豊臣側の浅野
長吉ながよし(後に長政)が、柴崎和泉守と酒巻頼負たねおが
守っていた長野口を打ち破り、成田側は本丸に
近い大手門(行田口)まで押され続けピンチに陥
ります。史料には、佐間口を守っていた正木丹
波守が数騎を率いて、後方から「裏切りが出た
ぞ!」と騒ぎながら襲いかかり、混乱した浅野
勢が逃げ帰るといふくだりがある。正木丹波守
は城外から回ったのか、城内の道を通ったのか
と、地図を確認しながら歩くと、地形的にも城
外には敵がたくさんいたはずなので、城内の道

を通ったのだろうと推測しました。武将が経路
を決めた根拠が、史実とつながって面白かった。
史料を読む時は合戦を俯瞰するイメージです
が、史跡を歩くと登場人物一人ひとりの目線に
なり、新たな疑問が湧くので、一周徒歩三〇分
ほどの城周辺をぐるぐる回っていました。歩い
て「距離感」が分かります。正木丹波守が守っ
ていた佐間口から大手門までは、おそらく馬を
走らせて五分もかからない距離。その近さに驚
きましたが、かかる時間が五分か、五〇分かで
物語が全く変わってきます。正木丹波守がいる
佐間口から、長親がいる本丸は見えるのか、見
えるとしたらどれくらい大きいか。声が届く
のか否かといったことを、長親側からの視点も
含めて想像しましたね。

「景色が変わらない問題」を解決

「忍者物で」と脚本の執筆を依頼されて書いた
二作目の『忍びの国』では、伊賀(三重県)を取
材しました。忍者が集まる伊賀衆へ、織田信長
の次男坊(北畠)信雄のぶおが伊勢から攻め入った「第
一次天正伊賀の乱」を題材にした同作の参考文
献は『勢州軍記』や『伊乱記』です。『勢州軍記』
は、寛永年間(一六二四〜四四年)に伊勢豪族